
猫とお話

夏樹 真

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫とお話

【Nコード】

N4743Y

【作者名】

夏樹 真

【あらすじ】

猫と少年がしゃべる話。ただそれだけです。

ある小説を読んだ影響がでてるんだけど。わかりますかね？

（前書き）

思いつきで書きました。そんな作品。

学校からの帰り道。

僕は何となく近くの公園に立ち寄った。

別に公園に用なんてなかった。

今日は、半日授業だったから午後まるまる時間が空いていて、そんな日に家に帰ってゲームやネットってというのがもったいないと思ったただけだ。

普段ろくに家から出ない僕がそんな事を感じるほど今日の秋晴れの空は突き抜けるように冴えわたっていた。

公園は、広さが学校の教室ぐらいの大きさでまあ普通の普通の公園だ。

遊具もちっぽけな砂場と、ブランコがあるくらい。滑り台も無ければ、シーソーも無い。当然僕は、ブランコに腰掛ける。

一人きりでブランコに座っていると、

男子高校生が昼間から一人でちっぽけな公園にいる事になんとか滑稽な気がしてきた。

良い若いもんがなにやってんだろ。

とちよっと自分がおかしくなつて、ふと横を見ると隣のブランコに一匹の猫が座っている事に気が付いた。

「なあ、こんな所で何してんだよ。お前も暇なのか？」

学制服姿の男子が隣のブランコに腰掛けた猫に話しかけている。普通の若い三毛猫だ。俊敏そうなほっそりとした体をしている。雄の三毛猫はいないらしいから、雌なんだろう。

「なあ、そんなきちつとした座り方して。お前どっかの飼い猫か？」

猫は、なぜだか置物のように背筋をぴんと立てて座っていた。しつぽの先までぴんとして、まるでお座りしている犬のような格好だ。猫でこの姿勢というのはあまり見ない。

まるで、ご主人様を出迎える召使いといった感じがした。しかもバランス悪いブランコの上で。

「ふん。今はそういう気分なのだ。別にお主が気にする必要もなからう。」

猫の方は、まるでなんでもないように言い捨てたが、学生は飛び上がって驚いた。

「ね、猫が、しゃ、しゃべった。しゃべったよな今?!」

「むろん喋ったが。というより話しかけたのはお主だろう?」

「…….そりゃ、話しかけたけど。普通猫から返事があると

は思わないだろ。単なる独り言みたいなもだ。」

「ふむ、それならかまわないな。存分に独り言を言うがよい。我は返事をせんからそれで良からう。」

啞然とした顔をしていた学生はあわてて。

「いや、まてまてまて！落ち着け！落ち着け！猫が喋るなんてそんなバカな。……そうだよ、妄想だな。

幻聴だよ。俺疲れてるのかな。あ、もしかしたら夢か？コレ夢なんだな。そっかなんだー焦ったわー。ホントに日本語喋る猫がいるのかと思つたわ。そーか、そーか、そりゃそうだよね。こんな普通の公園に日本語を喋れる猫がいるわけもないよな。あーびっくりしたぜ。」

「前言撤回する。独り言もうるさいので、公園から出てもらえないだろうか？せめて、あの砂場で一人で遊んできてもらえないか？」

「公園で昼間っから一人で遊んでいる高校生とか、怪しすぎるだろ！どんな羞恥プレイだ！」

「……………」

「……………」

「……マジか？」

「……マジかとは、何が？」

「マジでお前が喋っているのか？」

「さっきから散々会話しているではないか？」

それともあれか？お前は人間のくせに、さっきの会話をもう忘れるほどアホなのか？」

「ぐっ。ね、猫にバカにされてる！クソむかつく！」

「もうよい。集中が切れてしまった故、ちょっと会話につき合え坊主」

猫は、さっきまでのぴんとした姿勢を崩すと。

ブランコの上で腹ばいの姿勢になった。

さっきまでと違い良く見る日向ぼっこしている猫の図だ。

「で、小僧。こんな天気の良い昼間から。このような寂れた公園になんの用だったのだ？」

「別に用なんてないよ。学校が早く終わる日だね。

ちよつと、天気もいいしのんびりしながら。

進路とか、恋愛とか人生とか、どうでも良いことを

考えようと。まあ、ともかく用事なんてなくてぽーっと

しようと思っていたって所かな。」

「ほう。つまり、お前には友達がいないと。」

「い、いや、友達いないとか言っていないだろ！話し聞けよ！確かに暇してるのは確かだけど！って言うか、

さっきから坊主とかお前とか偉そうだな。」

「ふ、ふーん。こんな天気が良くて、学校が午前で終わるといふの

に、予定が入っていない時点で、友達居ないの確定じゃ。せめて、遊ぶ予定があっただけど、ドタキャンされた〜という言い訳ができれば良かったのじゃがな。

この私の目はごまかせん。お前には友達が居ない！！」

「少ない。から居ない。になつてんじゃねーか！居るよ！少ないけど居るって！いちいちム力つく猫だな。

だいたいお前はとうなんだ。こんな公園に一人っていうのはお前も一緒じゃないか。」

「人間と猫を同じ扱いにしては、困るな。猫とは、元来きままなものよ。群れるも群れないも、そいつの自由じゃ。人間のぼつちと、猫のぼつちを一緒にするでない！」

「ぼつちとか、なんか口調は堅苦しいのに、言葉が俗っぱ過ぎないか。」

「最新の流行は常に気をつけて居ないとな。情弱には、なりたく無いものだ。猫の世界は以外と闘争があふれておつてな。何丁目のどこが、誰の縄張りか、権力争いがはげしくてな。情報は私の武器だ。」

「お前は、何様なんだよ。それで………さつきから聞きたかつたんだが、聞いていいか？」

「なんじゃ？」ぼつち」よ。」

「だから、ぼつちじゃねーって。なあ、何で日本語喋れるの？」

「なぜ、と聞かれれば。たまたま、としか答えようがないの。前世が人間だったとか、脳をマッドサイエンティストに改造された実験猫でもない。はたまた、猫と見せかけて宇宙人でも無い。秘密道具を持った未来猫でもない。そんな、大冒険とは縁もゆかりもない。単なる猫よ。」

「日本語喋ってる時点で、たいした事あるようにしか思えないけどな。しかも、質問に答えてないし。」

「しいて、言うなら生まれついてという事じゃな。

幼少の頃から、人間の幼児と共に育てられてな。

まあ、才能もあったのじゃろう。うまいこと喋れるようになったしまった。わけじゃ。」

「ふーん。なんだか信じられない話だな。

猫の脳って人間の6歳くらいの知能しか無いんじゃないか？でも、俺と同じ位の受け答えしてるし、まだ宇宙人って方がしっくりくるけど。」

「まあ、嘘だからな。」

「嘘かよー!!」

「ふむ、このぐらいの嘘で騙せると思った私のミスだな。いやーすまない。お主を侮っておった。存外バカでは無いのだな。」

「なんだろう。ものすごくバカにされている気がする。」

「バカにしておるからなあ。」

「なんで、バカにされてんだよ俺。はあーあ。
んで、本当は？」

「わからん。冗談では無く、わからん。私にとってはむしろ、なぜ他の猫が喋らんのかがわからん。そもそも、なぜ人間は、人間しか喋らないと考えているのだ。」

「いやだって、人間以外の生物が日本語喋っているの見たことないし。」

「ふん。なら、今日から認識を改めるのだな。世の中には、喋る猫も居るということ。」

「いやまあ。目の前で見てるからさすがに信じるけどさあ。決して一般的じゃないってのはわかるだろ？常識的に考えて。」

「まったく、常識常識と。そんなんだから。君らはゆとりと呼ばれるんだよ。いいかね。常識など時代によって変わるものであり、そう単純でもないんだよ。かつて、不可能の例えとして黒い白鳥をさがすようなものと、言われた時代があったが、実際に黒の白鳥・・・こう言う矛盾するようだが・・・が見つかってしまったため、常識は書き換えられた。覚えておくといい。常識とは覆されるものだ。」

「・・・・・・・・・・。だからお前は、何様なんだよ？」

「我が輩は猫である。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・名前はまだない。」

「続けるのかよ!？」

「・・・・・・・・・・。むしろくしゃしてやった。
今は反省している。」

「犯罪者!？」

「まあ、冗談はともかく。本当にただの猫だ。日本語が喋れて、ち
よつとお茶目なな。」

「おちゃめさはいらねえな。」

「今なら、布団カバーもつきます。」

「いらねえって。」

「どうだ、私を飼わないか。ぼっちのお主にはちょうどいい相手だ
と思うが。」

「だからぼっちじゃ……。はあ、なんか言い合ってもかてねえな。
まあ、こんなペットが居ても面白いが。」

おとなしくしてろよ。あと、頭いいならトイレとかしっかりしろ
よ。そんなら飼ってやる。」

「当然だ。むしろ、お前のトイレの面倒ぐらいなら見てやるつ。」

「もういい。突っ込む気も失せた。さあ、帰ろっぜ。」

（見せもんにてきそうだなコレ）」

「なんだ、不穏な空気を感じたが」

「なんでもねーよ。さて、行こうぜ。」

「ふむ。よろしく頼む。」

学制服の男がブランコから立ち上がり、
一人で公園から出ていった。

仕方がない。猫が喋るなんて、本当は、そんな事あるはず無いのだ
から。

ふむ。やはり、妄想つてものは、寂しいものだ。

私は一人あくびを浮かべる。

因みに私は可愛らしい、三毛猫ではなく、くすんだ灰色一色だ。あこがれていたのだから、本当に。若くもなく、やせてもいない。ただの、おっさん猫である。今日も、ブランコで一日だらーつとしていたのだ。なに？姿がぜんぜん違うとな？ふっおっさんにもね。見栄はあるんだよ……。すまんね。

ふむ。やはり、こんな私を飼ってくれる変わった主は居ないようだ。彼の去っていった方を見る。

まあ、私を見ても何の反応もしない。無口な奴だったが悪い奴ではなさそうだったし。飼ってくれたらよかったんだがな。

おや、さっきの男が戻って来た。手にはコンビニの袋がある。これはもしや。

「ほら、お前も食うか。寂しいからつき合えよ。」

私は、男の手から唐揚げをありがたく頂戴する事にした。ほら、やはりこいつはいいやつだ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4743y/>

猫とお話

2011年11月17日17時57分発行